

斎藤茂吉歌集

山口茂吉・柴生田稔・佐藤佐太郎編



茂吉(1882 - 1953)は近代短歌の第一人者であり、日本の近代精神を体現した文学者の一人でもある。40年にわたる作歌活動によって生まれた全短歌から1688首を精選した。初期の生命感の躍動するなまの表現から、次第に複雑な人生の味わいをたたえる沈静へと移ってゆく。本歌集は、茂吉という個性あふれる作家の、精神の自叙伝でもある。



緑 44-2
岩波文庫

斎藤茂吉歌集

1958年9月5日 第1刷発行 ©

1978年9月18日 第22刷改版発行

1985年5月16日 第31刷発行

定価 450 円

著 者 さい とう も きち
斎 藤 茂 吉

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

波 文 庫

31-044-2

齋 藤 茂 吉 歌 集

岩 波 書 店

凡 例

一、本書は、斎藤茂吉の全作歌一万七千九百七首の中から一千六百八十八首を選び収めた。

一、作品は岩波書店版「斎藤茂吉全集」により、第一歌集「赤光」以下「あらたま」「つゆじも」「遠遊」「遍歴」「ともしび」「たかはら」「連山」「石泉」「白桃」「暁紅」「寒雲」「のぼり路」「霜」「小園」「白き山」「つきかげ」の十七歌集から選り、歌集に洩れている作品若干を、「補遺」として最後に収めた。

一、振がなは本来あるものは全部これを残し、なお若干を新しくつけ加えた。

一、作品の選出は、山口茂吉、柴生田稔、佐藤佐太郎の三名が協力してこれに当り、原則として二名以上が採った歌を収録することにした。

編 者

目次

赤 光

自明治三十八年至明治四十二年

折に触れ	元
地獄極楽図	元
蟹と蜻蛉	元
折に触れて	元
虫	元
雲	元
新年の歌	元
雑歌	元
塩原行	三〇

明治四十三年

折に触れて	三〇
細り身	三〇
分病室	三
田螺と彗星	三
をさな妻	三

明治四十四年

此の日頃	三
おくに	三
うつし身	三
うめの雨	四

藏王山……………三
秋の夜ごろ……………三

大正元年

睦岡山中……………三
木の実……………三
或る夜……………三
木こり……………三
さみだれ……………三
折々の歌……………三
夏の夜空……………三
土屋文明へ……………三
狂人守……………三
郊外の半日……………三
葬り火……………三
冬来……………三

柿乃村人へ……………四〇
ひとりの道……………四〇
青山の鉄砲山……………四〇
折に触れて……………四〇
雪ふる日……………四一

大正二年

さんげの心……………四二
根岸の里……………四二
きさらぎの日……………四二
口ぶえ……………四三
おひろ……………四三
死にたまふ母……………四四
みなづき嵐……………四四
麦奴……………四六
七月二十三日……………四六

悲報来…………… 四

あらたま

大正二年

黒き蜉…………… 五

乾草…………… 五

一本道…………… 五

大正三年

七面鳥…………… 五

一心敬礼…………… 五

雑歌…………… 五

諦念…………… 五

蝌蚪…………… 五

朝の螢…………… 五

百日紅…………… 五

遊光…………… 五

海浜守命…………… 五

三崎行…………… 五

時雨…………… 五

冬日…………… 五

大正四年

小竹林…………… 五

雑歌…………… 五

折にふれ…………… 五

雉子…………… 五

寂しき夏…………… 五

漆の木…………… 五

渚の火…………… 五

冬の山…………… 五

こがらし・・・・・・・・・・ 六

大正五年

夜の雪・・・・・・・・・・ 五

春泥・・・・・・・・・・ 五

寂土・・・・・・・・・・ 五

雨蛙・・・・・・・・・・ 六

五月野・・・・・・・・・・ 六

初夏・・・・・・・・・・ 六

深夜・・・・・・・・・・ 六

暗緑林・・・・・・・・・・ 六

蝸・・・・・・・・・・ 六

大正六年

節忌・・・・・・・・・・ 三

蹄のあと・・・・・・・・・・ 三

春光・・・・・・・・・・ 三

独居・・・・・・・・・・ 三

折にふれ・・・・・・・・・・ 三

初夏・・・・・・・・・・ 三

室にて・・・・・・・・・・ 六

日暈・・・・・・・・・・ 六

晩夏・・・・・・・・・・ 六

日日・・・・・・・・・・ 六

停電・・・・・・・・・・ 五

午後・・・・・・・・・・ 五

箱根漫吟・・・・・・・・・・ 五

長崎へ・・・・・・・・・・ 六

つゆじも

大正七年

漫吟 七〇

大正八年

雜詠 七二

大正九年

漫吟 七三

温泉嶽療養 七三

長崎 七五

唐津浜 七六

古湯温泉 七六

六枚板 七七

小浜 七七

長崎 七八

長崎より 七八

遠 遊

大正十年

長崎 七九

帰京 七九

山水人間虫魚 七九

洋行漫吟 八〇

維也納歌稿 其一 八〇

ドウナウ下航 八〇

独逸旅行 八一

維也納歌稿 其二 八一

維也納歌稿 其三 八二

伊太利亜の旅 八三

遍 歴

ミュンヘン漫吟 其一	一〇六
ミュンヘン漫吟 其二	一〇六
ドナウ源流行	一〇六
山の旅	一〇〇
ガルミツシュ行	一〇二
独逸の旅	一〇二
巴里雑歌 其一	一〇三
欧羅巴の旅	一〇三
巴里雑歌 其二	一〇四
帰航漫吟	一〇六

ともしび

大正十四年

帰国	一〇〇
火難	一〇〇
焼あと	一〇〇
随縁近作	一一一
近江蓮華寺行	一一一
閉居吟 其一	一一二
閉居吟 其二	一一二
沙羅雙樹花	一一三
木曾山中	一一三
木曾鞍馬溪	一一三
木曾氷が瀬	一一三
閉居吟 其三	一一三
高野山	一一四
熊野越	一一四
箱根漫吟の中	一一四
渾沌	一一五

昭和元年

家常茶飯……………二七

雪ぐもり……………二七

寒月集……………二七

麦の秋……………二七

上野国に入る……………二八

歩道の氷……………二八

金線草……………二八

霜……………二八

高遠……………二九

この夜ごろ眠りがたし……………二九

昭和二年

昭和二年歳旦頌……………三〇

山房小歌……………三〇

春のはだれ……………三〇

菰……………三〇

重馬山房折々……………三二

永平寺吟……………三二

アララギ第四回安居会……………三二

玲瓏巖……………三二

門外・帰途……………三三

十国峠……………三三

信濃行……………三三

天竜川……………三三

妙高温泉……………三三

この日頃……………三三

昭和三年

折に触れつつ……………三四

浅草をりをり……………三四

C 病棟 一四

業余小吟 一四

三山参拝の歌 一五

湯殿山 一五

出羽三山 一五

草むら 一五

折々の歌 一五

へかはら

昭和四年

日常吟 一六

一月某日 一六

所縁 一六

この日ごろ 一六

秋 一六

一日 一六

虚空小吟 一六

昭和五年

この日ごろ 一六

妙高温泉 一六

この日ごろ 一六

三山参拝初途 一六

月山 一六

羽黒 一六

雪谿 一六

高野山 一六

飛鳥 一六

丹生の川上 一六

近江番場八葉山蓮華寺小吟 一六

歳晚雑事 一六

連山

滿洲遊行

旅順	一四三
南山	一四三
千山	一四二
千山歸途	一四三
黑溝台	一四三
北陵	一四三
滿洲里	一四四
歸途	一四四
吉林松花江	一四四
吉林	一四五
吉林より四平街	一四五
オボ山	一四五

北平漫吟

鄭家屯	一四六
金山駅	一四六
歸路	一四六
北平漫吟	一四六
北平途上	一四六
故宮	一四七
万寿山昆明池	一四七
玉泉山	一四七
天壇	一四七
城門城壁	一四八
孔子廟辟雍殿	一四八
中海南海瀛台	一四八
陶然亭其他	一四八
歸路	一四九

石 泉

昭和六年

新年	一五二
この日ごろ	一五二
病牀漫吟の中	一五二
折々の歌	一五三
瑞巖寺	一五三
機縁小歌	一五三
上宮王院救世観世音菩薩	一五四
熱海にて	一五四
熱海小吟	一五四
初島	一五五
那須にて	一五五
養病微吟	一五五

折に触れて	一五五
大沢禪寺	一五五
葛温泉	一五六
箱根	一五六
早雲山	一五六
上山低徊	一五七
隆応上人挽歌	一五七
上山雜吟	一五八
帰路	一五八
伊香保榛名	一五八
挽歌	一五八
潟沼畔	一五九
大谷谿	一五九
中尊寺行	一五九
冬霧	一五九
屋上園	一六〇

銀杏……………一六〇

昭和七年

新春小歌……………一六一

春雄歌……………一六一

童馬山房近咏……………一六一

春より夏……………一六二

亀の子……………一六二

折に触れたる……………一六二

志文内……………一六三

志文内より稚内……………一六四

稚内……………一六四

南下……………一六四

層雲峽……………一六五

層雲峽より深川……………一六五

阿寒湖行……………一六五

白 桃

石狩川……………一六五

車房漫吟……………一六六

十和田湖……………一六六

昭和八年

朝の海……………一七〇

早春独吟……………一七〇

残雪……………一七〇

残雁行……………一七〇

山房独語の歌……………一七一

比叡山……………一七一

沙羅雙樹……………一七一

五日市浜……………一七二

厳島……………一七三